

## 大好きなお父さん

### 小 四

ぼくのお父さんは、生まれた時から耳が全く聞こえません。でも、お母さんと出会って結こんして、お姉ちゃんとはぼくが生まれました。

お父さんは、特別養老老人ホームで働いています。老人ホームには、耳が聞こえないお年よりがたくさんいます。お父さんは、そんなお年よりに、手話を使って、会話をしたり、身の回りの世話をしたりしています。ぼくは、お父さんが前にいたしせつの夏祭りに行ったことがあります。そのお祭りの会場では、耳が聞こえ

ない人には、分かりやすく手話を使ったり、字を書いたりしていました。その時、お父さんはずっと笑顔でした。それを見てぼくは、楽しそうだなと思いました。ぼくは、そんなお父さんがいきいきしているように見えました。

家族で出かけた時に、お店でごはんを食べていると、お父さんの知り合いの人と会うことがあります。お父さんは、手話で話していました。でも、ぼくには、その手話は速くて、話していることが分かりませんでした。でも、お父さんはその時にこにこして、ぼくやお姉ちゃんのことをしようかいしていました。それを見てぼくは、うれしいなと思いました。

ぼくは、そんなやさしいお父さんが大好きです。

お父さんは、最近はとてもいそがしくて、出ちようも前より多くなりました。それでも、ぼくはお父さんが大好きだから、心の中でいつもがんばって思っています。

お父さんのために、ぼくもお母さんやお姉ちゃんのように、手話を覚えて、お父さんと学校や習い事の話を作りたいです。

ぼくは、大きくなったら自分のゆめもあるけれど、お父さんを助けながら、耳が聞こえない人の役に立つものを作りたいです。

